

論 題 瀬戸内国際芸術祭2010における  
主催者と島民の意識の懸隔について  
男木島を事例として

指導者 葉袋 奈美子 専任講師

学籍番号 20718049

氏名 山口 麻由子

## はじめに

1980年頃から、パブリック・アートがまちづくりに大きく寄与してきた事例は多くみられる<sup>参1</sup>。その中でも、「瀬戸内国際芸術祭2010 アートと海を巡る百日間の冒険」(以下、芸術祭と記す)は「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を手掛けた北川フラム氏を総合ディレクターに迎え、海と島を会場に行われる世界で初めての国際芸術祭として注目を集めた。

メインテーマに「海の復権」を掲げ、過疎化、高齢化した瀬戸内の島々の地域再生を目指したこの芸術祭は、938,246人<sup>参2</sup>の来場者数を記録し、予想以上の実績をたたき出した。しかし「海の復権」は達成されたのか、その結果は数字では計れない。芸術祭をやることによって島民にどれだけ活力を与えることができたのか。1章では芸術祭の概要と調査方法を明示する。2章では男木島の概要。3章では1、2章を踏まえて、ヒアリング結果を考察する。

## 1章 瀬戸内国際芸術祭2010「アートと海を巡る百日間の冒険」

### 1-1 概要

メインテーマに「海の復権」を掲げ、瀬戸内の島々を航路で結んだ、野外展示型の現代アートイベントである(表1)。

表1 概要

名称	瀬戸内国際芸術祭2010「アートと海を巡る百日間の冒険」
開催期間	2010年7月19日(海の日)～10月31日(日)
会場	高松港周辺、直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島
主催	瀬戸内国際芸術祭実行委員会 会長：香川県知事 浜田恵造(前香川県知事 真鍋武紀) 副会長：香川県商工会議所連合会会長、高松市長 総合プロデューサー：福武総一郎((財)直島福武美術・館理理事長) 総合ディレクター：北川フラム(女子美術大学美術学部教授) 以下略 <sup>参2</sup>

### 1-2 分析の視点

本研究では「瀬戸内国際芸術祭2010 総括報告」<sup>参2</sup>「対談 北川フラム×西村幸夫アートは地域を再生する」<sup>参3</sup>「瀬戸内国際芸術祭2010公式ガイドブック」<sup>参4</sup>「NODE NO.11」<sup>参5</sup>から、実行委員が芸術祭を通じてできる地域再生する効用として挙げている点を抽出した。以下の5点にまとめる。

- ①アーティストと共同でアートを制作することでアートに誇りを持つ<sup>参3</sup>
- ②現代アートが若者を誘致し、若者と対話することで元気になる<sup>参4</sup>
- ③アートが里山の良さを再発見するきっかけとなり、島に誇りを持つ<sup>参4</sup>
- ④アートをきっかけに食や農への転換をはかる<sup>参3</sup>
- ⑤雇用の創出になり、継続的な経済効果が期待できる<sup>参5</sup>

以上を踏まえ、主催者と島民の意識に懸隔があったと仮定してヒアリングを行った。調査内容にばらつきを無くすため、島の規模、外的要因(観光資源、インフラなど)を考慮した上で対象地域は香川県高松市男木町(以下、男木島と記す)に決定し、13名の島民にヒアリングを行った(表2)。

表2 ヒアリング対象者属性

名前	A	B	C	DM	DF	E	F	G	HF	HM	I	JM	JF
年齢	70	62	52	62	62	69	74	75	91	75	65	74	74
職	有	有	有	無	有	無	無	有	有	有	無	無	無
性別	F	M	M	M	F	M	F	F	F	M	M	M	F
家族(人)	3	2	1	2	2	2	1	1	2	2	2	2	2
	同	別	独	別	別	別	亡	亡	別	別	別	別	別

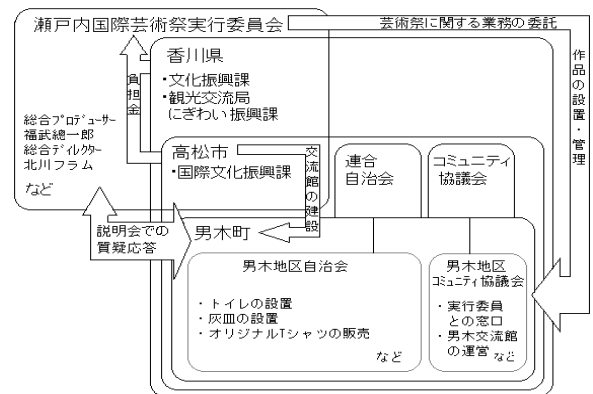
M:男性 F:女性 同:家族と同居 独:独身 別:子どもと別居 亡:配偶者死亡  
DM/DF、HM/HF、JM/JFは夫婦である。

## 2章 男木島での芸術祭の受け入れ態勢

男木島では男木地区コミュニティ協議会<sup>注1</sup>が芸術祭の主な窓口となり芸術祭実行委員とコンタクトを取り、男木交流館<sup>注2</sup>での食品提供、館内の清掃などを行っていた。男木地区の自治会<sup>注3</sup>では自主的に簡易トイレの設置や清掃を行っていた。(図1)

つまり、島と実行委員会の間ではきちんと連携・協力する組織体制は整えられていたことがわかる。

図1 瀬戸内国際芸術祭と男木島の関係



## 3章 瀬戸内国際芸術祭における主催者と島民の意識の懸隔

### 3-1 アーティストとの交流

現代アートの制作に関わった島民はいなかった。しかし、アーティストに差し入れをあげた人や労いの言葉をかけた人はいた。また友人のように仲良くなった島民もいたが若者とされる50代のみであった。オンパ<sup>注4</sup>を日常的に利用している人(主に高齢の女性)は、オンパ・ファクトリーのアーティスト達と交流を活発に行っていたようだ。

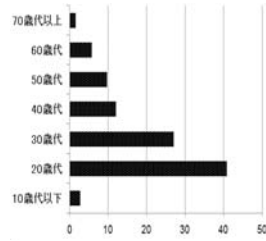
以上のことから、制作を手伝った事例は見られなかったがアーティストとの交流は頻繁に行われていたことがわかった。しかしアートに誇りを持ったかという点では確認できなかった。

### 3-2 来場者との交流

芸術祭全体の感想として、良かったことに若者と話ができたとを挙げる人が多かった(表4)。来場者の年齢層は10歳から39歳までが約80%を占めている。(図2)

しかし会期後、作品展示数が16から8に減ったものの、まだ見応えのある作品が残されているにも関わらず、1日平均919人

だった来場者数<sup>参2</sup>が数えられる程度に落ち込んでいる。「少なくなると事前に言われていたが、まさかここまで落ち込むとは」<sup>注5</sup>と落胆している島民も少なくはない。減少の原因に船賃の値上げ、航路の縮小、宣伝不足という意見もあった(表5)。



以上のことから、芸術祭の期間中は多くの若者との交流により元気になったが、会期終了後には若者も来なくなり一過性のイベントに終わってしまった印象とも言える。

表4 芸術祭全体の感想

良かったこと	若者と話ができたこと 9人 (B、C、F、G、H、I、J、M、JF) 男木の景色を楽しんでもらえたこと 5人 (F、G、DF、JM、JF) 人との縁ができたこと 3人 (G、DF、DM)
悪かったこと	安い賃金で働かされたこと 1人 (JF) 道でのトラブルがあったこと 2人 (E、JM) 観光客(年配者)のマナーがわるかったこと。4人 (E、DF、JF、JM) 人が多くて落ち着かなかったこと 3人 (F、G、I) マスコミの態度が悪かったこと 1人 (I)

表5 芸術祭の影響(会期中と後の変化)

元通り 8人	来場者が少なくなった8人 (A、B、E、F、G、I、JM、JF) (ア)船の航路が少なくなり賃金も値下げをやめた 1人 (JF) (イ)宣伝が足りない 2人 (F、G)
良くなったこと	交流館ができた (A) 島の知名度があがった (F) 移住の申し出があった (B)

### 3-3 現代アートによる島の魅力の再発見

現代アートを見に来た来場者たちに島の魅力が伝わって嬉しかったという意見がいくつかあった。しかし現代アートへの理解を示した島民は少なく「男木島を表現していると言われたがピンとこなかった。」<sup>注6</sup>という意見もみられた。

以上のことから島民たちが、現代アートによって島の魅力の再発見ができたとは言いきれない。

### 3-4 食や農への転換

半農半漁で、島の雇用を支えてきた時代<sup>参6</sup>もあったが、現代の男木島では人口の減少に伴った高齢化<sup>参7</sup>により、産業が成立していない。島の特産も目立ったものがないため(表6)食や農への転換は難しいと考えられる。

表6 男木の抱える問題

高齢化	・平均年齢75歳の限界集落である ・空家増加の原因となっている
産業	・高齢化に伴った第一次産業の衰退 ・子供のUターンの可能性の薄さ
無医村	・救急船(せとのあかり)への期待も薄い
交通手段	・海上交通のみだが2時間に1本の船便 ・高松からの運賃が高い(片道500円)
防災	・消防士が専任していない ・警察も女木島には専任しているが男木島にはいない
名産	・ゲタ、ひしお、味噌、たこ
自治	・自治会役員の集まりが悪いなど機能しにくい状態である
学校	・来年4月に廃校が決定

### 3-5 雇用の創出

芸術祭への参加は三者三様であった(表7)。自治会役員を中心とした一部の住民はこの芸術祭を契機に地元の産物の販路確保など試みたが、予算・労働環境などを考慮したところ現実的ではなかった。逆に、元々島で商店や旅館を構えている人からは「過去最高の売上を記録した」<sup>注7</sup>という意見も見られた。芸術祭において、個人ベースでみる経済効果には大きな格差があったようだ。また、芸術祭期間中に苦勞したこととしてコミュニティ協議会の仕事(男木交流館内での飲食物の調理、提供)があった。コミュニティの婦人部では400円という安い時給で、長時間の労働をした人もいた。このことから、島民がまぼ無償で裏方として働いていたという事実も明らかになった。

以上のことから、継続的な利益を生むシステムは成立しておらず、島民の協力無くしては来場者の食の確保も難しい状態であったことがわかった。

表7 芸術祭への参加

コミュニティセンターの仕事 4人(B、F、G、JF)	アート鑑賞した 6人(B、C、E、F、G、JF)
自治会役員の仕事 4人(DM、DF、E、JM)	
商店経営3人(A、HM、HF)	
ほとんど参加していない 1人(I)	
自主的な仕事 3人(C、DF、DM)	

### おわりに

本稿では主催者の理想と島民の意識には大きな隔たりがあったことが確認された。

2章で確認されたように、島と実行委員会の間では組織としては連携・協力していた。しかし、1-2で提示した項目ごとに見ていくと①アーティストと共同で制作していた人がみられなかったため、本稿では確認できなかった。②会期中は多くの若者が訪れ、一時的に理想的な状態になったといえるが、会期終了に伴い来場者は激減した。③本稿では確認できなかった。④男木島の抱えてきた問題が解決されない限り食や農への転換は難しい。⑤自主的に芸術祭の機会を利用して雇用の創出を図った事例も見られたが、実用化は厳しく芸術祭においては商店・旅館経営者以外で個人ベースの利益があった島民は少なかった。

しかし、今回の反省を踏まえ2013年の次回開催に向けてコミュニティ協議会と自治会が協力し、継続的な利益が期待できる仕組みを作れば、地域再生も夢ではないだろう。

#### 【主な参考文献】

- 参1 「ブリック・アート」という概念 柴田葵 初版掲載2008年7月1日 改訂2009年1月3日  
参2 瀬戸内国際芸術祭2010 総括報告 瀬戸内国際芸術祭実行委員会 2010年12月20日発行  
参3 季刊まちづくり27 学芸出版社 2010年6月1日  
参4 瀬戸内国際芸術祭2010公式ガイドブックアートをめぐる旅・完全ガイド 美術出版社 2010年7月16日発行 発行人 大下健太郎  
参5 NODE No.11 美研インターナショナル 2010年11月1日発行  
参6 男木島の伝言 中山克重 著  
参7 せとうち暮らし香川 香川県政策部政策課 2010年8月発行より、1958年(昭和33年)から2010年(平成22年)までに1044人から206人までに落ち込んでいる。

#### 【注釈】

- 注1 平成22年2月より高松市で活動した施設。市の職員が専任している。  
注2 男木島にある市の施設。「男木島の魂」ジャウメ・プレサンの作品。中で食事、乗船券の購入ができる。  
注3 加入が必須。男木地区は1〜10組までに分かれており、それぞれに役員がいる。コミュニティ協議会に内包されている。  
注4 オンパ=乳母。オンパ=ファクトリーは男木島特有の細い坂道を行き交う乳母に着目し、男木島民の乳母の作成・修理を行うアーティスト集団。高松市のアーティスト。  
注5 Eさんヒアリング、注6 Fさんヒアリング、注7 HM/HFさんヒアリング